



T 2  
A 0  
R 1  
L 3

*tanl* TOKYO ART RESEARCH LAB

# TOKYO ART RESEARCH LAB 2013

Tokyo Art Research Lab 2013

活動を続けていくために、意識と技術を更新する 森司 02

Tokyo Art Research Lab 04

- 1 知る、学ぶ、身につける | 講座 |
- 2 読む、使う | 教本・ツール・ドキュメント |
- 3 掘り下げる、検証する、つくる | 研究・開発 |

創りだす手の思想と実践へ向けて 港千尋 16

## 活動を続けていくために、意識と技術を更新する

森司（東京アートポイント計画ディレクター）

02 03

アートプロジェクトの現場において意識とスキルを向上させるためには、究極のところ失敗に学ぶ以外ない。もちろん、失敗を失敗と認識できることだ。成功と失敗の基準、評価の指標からして曖昧なケースには、わかりやすい定量評価（いわゆる動員数と費用対効果の類）が、重くのしかかってくる。既存の基準により、こぼれおちてしまう未評価の成果を見逃さないためにも、失敗に学ぶ意識は不可欠だ。

今すぐできる対策がある。定性評価手法を導入し、自らの行為を検証し、次の企画に活かすサイクルを確立させる。そのためには、新しい人材と手法が必要となる。現場は、これまでにはない分野での経験と知識をもつ専門家を必要としている。港千尋が「社会的創造者としてのリサーチャー」と命名した人たちだ。

経験と失敗から学び取られた個々人の経験則を共有し、経験値をツールとオペレーションに落とし込み、誰もが活用できるようにする。アートプロジェクトのための一層の環境整備が求められている。東京アートポイント計画では、そのための取り組みをTokyo Art Research Lab（以下、TARL）が担う。

アートプロジェクトは、定量評価の視点から、動員的成功を求められてきた。しかしリスクゼロのプロジェクトはあり得ない。チャレンジなきアートプロジェクトは退屈に違いない。時代に応答したプロジェクトは、少なからず新しい領域に手をかける。それゆえに、プロジェクト主体者がどのレベルであろうとも、常に経験し失敗し学び続ける者となる。続けることで、現場力の向上を果たすことがかなうわけだ。

しかし同時に、プロジェクトを持続して展開するためには、一定の意義を示し、社会的信用を獲得する必要もある。マネジメントスキルの向上は必須のこととなる。

東京アートポイント計画が、アートプロジェクトの実践の場を展開し、リサーチプロジェクトとして「Tokyo Art Research Lab」の名称で座学と研究開発の場を用意したのは、まさに現場の経験値を知とスキルとし、その先のマネジメントを可能にするためである。

ところで、日本型アートプロジェクト\*が街場で展開されるようになって少なくとも10年は経つ。そしてこの間、社会的評価の獲得が活動の持続性を担保する認識よりも、現場をつくることが優先されがちな傾向は変わっていない。しかも10年スパンで見渡し、詳細に現場の担い手を見て行くと、回を重ねた開催が続けられている団体は多くない。

団体組織の運営とアートプロジェクトの運営は、パラレルでありながらも表裏のものだ。どちらの運営力がというよりも、共に基礎力を高めていくべきものとなる。

アートプロジェクトに携わる多くのチームで、企画・実施と比べて取り組みが弱いのがドキュメントとアーカイブ、検証と評価だ。現場では、企画・実施から検証・評価の運営サイクルが順を追って展開するだけではなく、それぞれの活動が同時に展開され、相互に影響を及ぼすことが分かってきた。加えて、継続的に活動を展開する意思があるのであれば、より自覚的に検証・評価を起点にサイクルを認識する方が、企画・実施の目的や方向性が明確になり、マネジメントのループを描きやすいようだ。

今年度、TARLは、運営の基礎を強化する講座とドキュメント・アーカイブ、検証・評価の方法を開発する研究、この2つをリサーチテーマとして、アートプロジェクトの持続可能な方を探る。講座では受講生を、研究ではリサーチャーを募集し、多くの関係者と賑やかに事業を進めて行く計画だ。

東京アートポイント計画がTARLをスタートさせた平成22年のシラバスに、「創りだす手の思想と実践へ向けて」を港千尋に寄稿してもらった。今回、本冊子に全文再録をした。期待をこめて予測的に記された事柄のいくつかは具体化し、TARLが育成を目指す人材とされた「社会的創造者としてのリサーチャー」が現場の担い手となりつつある。彼らのようなリサーチャーを必要とする理由として、港は「身体性と記憶」の章で、アートプロジェクトと言葉について、次のように書いている。

一般的な美術展が、「すでに起きたこと」としての作品を鑑賞者という集団へ差し出すことだとすれば、アートプロジェクトは「これから起こそうすること」へ向けて、集団的な身体をつくってゆく営みであると言ってもいいかもしれません。／プロジェクトを実現する集団的身体の経験は、進行中にもまたそれが終わった後にも、周りの人に伝わってゆきます。直接関係した人だけでなく、当該の地域や、遠く離れた場所にも経験が共有されるためには、言葉が必要です。

鑑賞するのみの消費者から、地域文化の担い手として生産者になる。東京アートポイント計画が標榜する拠点とは、そのような集団が担い手となり育んでいく活動を指す。

活動を続けていくために、継続して経験と失敗に学び、意識と技術を共に更新ていきましょう。

\*「日本型アートプロジェクト」については、本冊子10頁、「日本型アートプロジェクトの歴史と現在 1990→2012」を参照。

### アートプロジェクトを担う全ての人のための「使える」ラボ

今、まさにアートプロジェクトの世界に飛び込もうとスタートラインに立った人。ひととおりの実践経験をへて、アドバンスステージへと進むために奮闘しているプロジェクトスタッフ。事業を続けていくための体制強化やスキルアップに取り組もうとする組織の事務局。事業の更なる発展を目指し、あらためて活動の意義を考えるとともに、社会における自らの立ち位置を確認したいと思っているプロジェクトの担い手たち。現場と併走しながら、プロジェクトの価値を捉え、言語化し、社会へ伝えようとする研究者たち……。

Tokyo Art Research Lab (以下、TARL) は、アートプロジェクトを実践する人々に開かれ、共につくりあげるリサーチプログラムです。現場の課題に対応したスキルの提供や開発、人材の育成を行うことから、社会におけるアートプロジェクトの可能性を広げることを目指しています。

地域社会のなかで多様な関係者とのコミュニケーションを図りながら、継続的にアートの実践を続けていくことはアートプロジェクトの可能性を広げるための重要な方法のひとつです。そのためには、様々なチームメンバーと連携しながら、適切な方法で関係者の信頼を築きながら、プロジェクトの企画や運営を進めていく必要があります。同時に、日々の記録や検証を蓄積し、ときには活動を振り返り、実践の意義を深めていくことも大切です。しかし、それらをプロジェクトの現場で円滑に進めるための環境は充分に整っているとはいえないません。

TARLは、継続的なアートプロジェクトの現場で多様な課題に立ち向かう全ての人々のための「使える」環境整備プログラムです。

### 東京アートポイント計画

TARLは、東京都内の多様な地域の文化拠点の形成を目的とした、「東京アートポイント計画」のリサーチプログラムとして実施しています。

「東京アートポイント計画」は、まちなかにある様々な地域資源を結ぶアートプログラムを、アーティストと市民が協働し実施・展開することで、それらを可能にするプラットフォーム(=人的資源・拠点・ネットワーク)を形成し、地域社会の担い手となるNPOを育成しています。東京の様々な魅力を創造・発信することを目指した、「東京文化発信プロジェクト」の一環として東京都と公益財団法人東京都歴史文化財団が展開している事業です。

### 平成25年度事業 東京アートポイント計画ラインアップ

#### ●アートプログラム

「墨東まち見世」アートプラットフォーム  
特定非営利活動法人向島学会

三宅島大学  
三宅島大学プロジェクト実行委員会、三宅村

TERATOTERA  
一般社団法人Ongoing

長島確のつくりかた研究所：だれかのみたゆめ  
一般社団法人ミクストメディア・プロダクト(mmp)

ぐるぐるヤ→ミ→プロジェクト  
一般社団法人谷中のおかって

川俣正・東京インプログレスー隅田川からの眺め  
一般社団法人CIAN

小金井アートフル・アクション！  
特定非営利活動法人アートフル・アクション、小金井市

アーティスト・イン・児童館  
特定非営利活動法人アーティスト・イン・児童館、練馬区教育委員会

アートアクセスあだち 音まち千住の縁  
東京藝術大学音楽学部、特定非営利活動法人やるね、足立区

東京事典 Tokyo Jiten  
特定非営利活動法人アーツイニシアティヴトウキョウ [AIT/エイト]

#### ●リサーチプログラム

Tokyo Art Research Lab  
特定非営利活動法人アーツイニシアティヴトウキョウ [AIT/エイト]  
特定非営利活動法人アート&ソサイエティ研究センター

#### ●東京都による芸術文化を活用した被災地支援事業

Art Support Tohoku-Tokyo  
特定非営利活動法人いわて連携復興センター、えずこ芸術のまち創造実行委員会  
特定非営利活動法人Wunder ground

## 東京アートポイント計画の2つのアプローチ



平成25年度は、文化活動拠点を形成する「アートプログラム」と、その拠点の担い手となる人材の育成や、プロジェクト運営のための環境整備を行う「リサーチプログラム=TARL」を実施します。2つのプログラムの連携をより深め、相互にフィードバックをしながら事業を展開します。

高円寺一国分寺間の中央線沿線地域で展開するアートプログラムTERATOTERA（以下、「TT」）では、担い手である「テラッコ」（ボランティア）が、企画・実施を本格的に担う体制での実施を予定しています。同時にアートプロジェクトの企画構想から実施までを学ぶ「アートプロジェクト0123（オイッチャニーサン）」のアドバンス講座として新設された「アートプロジェクトを456（仕込む）」がTARLの一環としてTTの現場で実践されます。また、足立区千住地域で展開する「アートアクセスあだち 音まち千住の縁」では、プログラムと連動して、音のプロジェクトの記録の残し方の研究にも着手します。

TARLでは、3つのプログラムを展開しています。

1. 知り、学び、身につけるための〈講座〉の開催
2. 読み、使うための〈教本・ツール・ドキュメント〉の提供
3. 掘り下げ、検証し、つくる〈研究・開発〉の実施

プログラムの活用方法として以下の目安を設定しています。

次ページからの紹介とあわせて、最適なプログラム探しの参考としていただければ幸いです。

**はじめる**

- ・主にベーシックなスキルの習得や概論として提供するプログラムです。
- ・プロジェクトを始めてみたい人、始めたばかりの人におすすめです。
- ・一部プログラムは、プロジェクトの新人スタッフの研修に活用できます。

**つづける**

- ・プロジェクトを続けるためのスキルの提供や議論をするプログラムです。
- ・プロジェクトを続けていきたい人、続けてきている人にオススメです。
- ・プロジェクトの運営スキルの再確認や、新たなスキルの習得に活用できます。

**かんがえる**

- ・プロジェクトの立ち位置や意義を考える材料の提供や、未検証の課題を議論するプログラムです。
- ・プロジェクトについて考えたい人、考えている人にオススメです。
- ・プロジェクトに調査や研究という視点で関わりたい人にもオススメです。

アートプロジェクトの現場を支える知識やスキルを提供する「講座」プログラム。  
「NPO運営の基礎講座」を中心に、プロジェクト運営のベーシックなスキルの習得に重点的に取り組みます。その他に「現場での実践型講座」「アートプロジェクトの概論講座」を実施します。

NPO運営の基礎講座

**研修プログラムI:****表現・創作活動のための法と権利を学ぶ入門講座****～表現の自由、知的財産、雇用、契約、マネジメント、会計～**

アートプロジェクトの現場で知っておくべきベーシックな法律について学ぶ講座。

全5回の講座と1回のワークショップを年2クール実施予定。

コーディネーター: Arts and Law

実施時期: 平成25年7月～平成26年3月

はじめる つづける

**研修プログラムII:****プロジェクトを守るために情報セキュリティ講座**

個人情報の取り扱いなど、プロジェクト運営に必要な情報セキュリティの基礎講座。

年4回を予定。

実施時期: 平成25年5月～平成26年2月

はじめる つづける

**集中セミナー：運営・記録・評価のサイクルをつくる**

つづける

アートプロジェクトの運営に欠落しがちなプロジェクトの運営・記録・評価というサイクルに焦点をあてた3日間の集中講座。

コーディネーター: 森司（東京アートポイント計画 ディレクター）

実施時期: 平成25年8月、12月

**プロジェクト実践セミ：構想から実現へ／実現から継続へ**

はじめる

ささやかなアートプロジェクトをゼロから構想し、実現するプロセスに参加しながら、企画設計・広報・運営等の手法を学び、継続のために欠かせない記録編集や検証・評価へ向けた取り組みも行う実践型講座。

コーディネーター: 橋本誠（アートプロデューサー）、  
大内伸輔（東京アートポイント計画 プログラムオフィサー）

コラボレーター: 岩田とも子（アーティスト）

実施時期: 平成25年6月～平成26年2月

現場での実践型講座

**アートプロジェクトを456（仕込む）**

はじめる

アートプロジェクトの開催に向けて様々なスキルを獲得するための実践型講座。

受講生が提案するプランをもとに、平成26年2月に「TERATOTERA」の中でアートプロジェクトとして実現させる。

コーディネーター: 小川希（TERATOTERA チーフディレクター／Art Center Ongoing代表）

実施時期: 平成25年6月～平成26年3月 ※TERATOTERA事業の一環として実施。

**渋谷アートファクトリー計画 Fab スターターズガイド**

はじめる

アートの分野においても注目されているデジタル工作機器（Fabマシン）の基本から応用までを学ぶ連続講座。

企画: Fab Café LLP

実施時期: 平成25年7月～11月

**『日本型アートプロジェクトの歴史と現在**

はじめる つづける かんがえる

**1990年→2012年』を読む**

現代の日本におけるアートプロジェクトについて、平成22年度から平成24年度までの公開講座・研究会の記録をもとに編纂されたテキストを用いて、ゲストとともに各テーマの理解を深める。

コーディネーター: 熊倉純子（東京藝術大学音楽学部音楽環境創造科教授）

企画: アートプロジェクト研究会

実施時期: 平成26年1月～3月

アートプロジェクトの概論講座

**『日本型アートプロジェクトの歴史と現在**

はじめる つづける かんがえる

**1990年→2012年』を読む**

現代の日本におけるアートプロジェクトについて、平成22年度から平成24年度までの公開講座・研究会の記録をもとに編纂されたテキストを用いて、ゲストとともに各テーマの理解を深める。

コーディネーター: 熊倉純子（東京藝術大学音楽学部音楽環境創造科教授）

企画: アートプロジェクト研究会

実施時期: 平成26年1月～3月

参加申込について: 申込受付期間、講座開催日、参加費、定員等は、講座によって異なります。  
最新情報・詳細はウェブサイト (<http://tarl.jp>) にてご確認ください。

**メイン会場 :****東京文化発信プロジェクトROOM 302**〒101-0021 東京都千代田区外神田6-11-14  
(3331 Arts Chiyoda 3F)

会場はTARL講座が行われるメインのレクチャーノルーム、  
TARL事務局の拠点、アートプロジェクトに関する様々な資料  
を閲覧することのできるP+ARCHIVE（ビープラス アーカイブ）  
センターとして活用されています。

※P+ARCHIVEセンター 開館日時: 木曜・金曜 13:00～  
18:00 (年末年始、祝日休館。臨時休館する場合有り。)



TARLでは、講座や研究の成果をまとめた教本やドキュメントブック、ノウハウの詰まったマニュアル、プロジェクトの運営や研究に活用できるサービスをウェブサイト上で公開しています。いつでも、どこでも、プロジェクトの自主的な研修や研究会の議論等にご活用いただけます。

※各コーディネーターの所属・肩書は講座実施時点のもの

### アートプロジェクトについて

#### 『アートプロジェクトの0123』 はじめる

アートプロジェクトを「知る」全20回の連続セミ「アートプロジェクトの0123（オイッヂニサン）」の成果を9名のゲストとの対話を中心に収録。

関連講座：アートプロジェクトの0123（平成22～24年度）

コーディネーター：小川希（TERATOTERAチーフディレクター、Art Center Ongoing代表）

#### 『日本型アートプロジェクトの歴史と現在』 はじめる つづける かんがえる

##### 1990年→2012年】

日本におけるアートプロジェクトの現在進行形を、ケーススタディと理論化の双方から研究する公開講座の成果として、ゲストとの対話を中心に収録したドキュメントブック。

関連講座：日本型アートプロジェクトの歴史と現在 1990-2010（平成22年度）

集中セミナー：アートプロジェクトの研究（平成23年度）

日本型アートプロジェクトの歴史と現在Ⅱ—定義の試み&3.11以降の動き（平成24年度）

コーディネーター：熊倉純子（東京藝術大学音楽学部音楽環境創造科教授）

#### 『東京を考える、語るⅡ』 かんがえる

川俣正と3名のゲスト（キュレーター、ライター、映像作家）による東京をテーマにした対談を収録したドキュメントブック。

関連講座：川俣正 東京トークシリーズ「東京を考える、語るⅡ」（平成23年度）

コーディネーター：川俣正（美術家）

### 企画、実施、運営、組織について

#### 『実践!プロジェクトデザイン講座—新しい価値を生み出すための方法』 はじめる

プロジェクトデザインにおける手法、事例、また各回の講座ゲストによるコラムを収録したドキュメントブック。

関連講座：実践!プロジェクトデザイン（平成24年度）

コーディネーター：林千晶（米国NPOクリエイティブ・コモンズ アジア・プロジェクト・コーディネーター）

#### 『アートプロジェクト運営ガイドライン』 はじめる つづける

アートプロジェクトを「実施する」一連のプロセスのポイントをチェックできる運営ガイドラインブック。コーディネーター、ゲストによるその活用に関する考え方を示したエッセイも収録。

#### 『アートプロジェクト運営ガイドライン—運用版』 はじめる つづける

『アートプロジェクトの運営ガイドライン』を、現場ですぐ実践できるように改訂。

プロジェクト運営の全体像を流れに沿って把握できる「運営ガイドラインマップ」付き。

#### 『「組織」から考えるアートプロジェクトの可能性』 つづける かんがえる

##### —続くか、止まるか、それは組織次第かもしれない

アートプロジェクトを続けるために必要な仕組みとして「組織」に着目。ユニークな組織の運営を手掛ける実践者をゲストに迎え、4つの視点から「継続の仕組み」を検証したテキスト。

関連講座：プロジェクト運営 ぐるっと360度（平成22年度）

「組織」から考えるアートプロジェクトの可能性（平成24年度）

コーディネーター：帆足亜紀（アートコーディネーター）

### 記録、評価について

#### 『アートプロジェクトを評価するために：レクチャーノート』 はじめる つづける

アートプロジェクトの評価に関する全8回のレクチャーの要旨と、研究会で得られた成果を収録したドキュメントブック。

関連講座：アートプロジェクトを評価するために～評価の<なぜ?>を徹底解明（平成22年度）

コーディネーター：若林朋子（企業メセナ協議会 シニア・プログラム・オフィサー）

#### 『アートプロジェクトを評価するために2：評価のケーススタディと分析』 つづける かんがえる

アートプロジェクトの評価に関わる視点を提供するゲストレクチャーの記録と研究会メンバーによる論考を収録したドキュメントブック。

#### 『アートプロジェクトのつかまえかた：評価』 つづける かんがえる

##### 「評価」のためのリサーチの設計と実践の記録

アートプロジェクトの実践とリサーチを行うゲストのレクチャーを収録したドキュメントブック。

関連講座：アートプロジェクトを評価するために2—評価のケーススタディと分析（平成23年度）

「評価」のためのリサーチの設計と実践（平成24年度）

コーディネーター：佐藤李青（東京アートポイント計画 プログラムオフィサー）

『アート・アーカイブガイドブック β版』 はじめる つづける

アート・アーカイブを構築するためのガイドラインと、都内近郊の5つのアートプロジェクトにおけるケーススタディを収録したガイドブック。

『地域・社会に関わるアートアーカイブ・プロジェクト』 つづける かんがえる

**P+ARCHIVE 一年の活動記録』**

P+ARCHIVEが平成22年度に実施した連続レクチャーや、現在進行形のアートプロジェクトを実際にアーカイブ化することを試みた月1回の研究会などの全記録をまとめたドキュメンテーション。

『「現代アートの記録と記憶」プロジェクト』 つづける かんがえる

**Morphe' 95-2000 活動の記録』**

平成7年から平成12年にかけて、東京・青山を主な舞台として開催された、地域型のアート・プロジェクト「Morphe (モルフェ)」の関連資料公開に向けて行った1年間の作業のドキュメンテーション。

『「種は船 in 舞鶴」アーカイブプロジェクト』 つづける かんがえる

**活動の記録 2012』**

現在進行形のアートプロジェクトを記録するための方法論とワークショップ形式の講座概要を収録。

『ドキュメンテーション 国際シンポジウム 地域・社会と関わる』 つづける かんがえる

**芸術文化活動のアーカイブに関するグローバル・ネットワーキング・フォーラム』**

P+ARCHIVEで平成25年2月に実施した国際シンポジウムでの各ゲストのプレゼンテーション等を収録した記録集。

関連事業:P+ARCHIVE(平成22-24年度)

コーディネーター:NPO法人アート&ソサイエティ研究センター

『記録と調査のプロジェクト「船は種」に関する』 つづける かんがえる

**活動記録と検証報告』**

『種は船 in 舞鶴』(一般社団法人 torindo 他主催)を対象に、記録と調査の方法を設計、実施、検証することを目的として、NPO法人 recipを中心に行われたプロジェクトの報告書。

関連事業:複合型リサーチプロジェクトの実践(平成24年度)

ウェブサイト **artscoop**

学生からプロフェッショナルまで、活動歴の多少を問わず、視覚美術や工芸のクリエイターに役立つ信頼性の高い実用的な情報を、法律や会計などを含む専門的な見地から提供するウェブサイト。

関連講座:アートのお金と法律入門(平成22年度)

コーディネーター:Arts and Law (NPO法人コミュニティデザイン協議会)

**イベントPR・レポートサイト artmore**

アートイベントの主催者がイベント情報やレポートを登録できるウェブサービス。登録された情報が日付や直感的なキーワードで絞り込まれ、サイト訪問者は、その日の気分で興味のあるイベントを探すことができる。

関連講座:パブリック・リレーション講座(平成23年度)

モデレーター:林千晶(株式会社ロフトワーク 代表取締役、米国NPOクリエイティブ・コモンズ アジア・プロジェクト・コーディネーター)、草彅洋平(株式会社東京ピストル 代表)

**P+ARCHIVE Digital Archives(所蔵資料検索)**

国内外の「地域、社会に関わるアート」に関するプロジェクトの基礎データを検索することができるオンラインデータシステム。プロジェクト名、作品タイトル、アーティスト名などで検索ができる。

関連事業:P+ARCHIVE(平成22-24年度)

コーディネーター:NPO法人アート&ソサイエティ研究センター

**「見巧者」になるために:クロスレビュー**

講座の課題で取り上げたイベント「HARAJUKU PERFORMANCE+2010」のクロスレビューをウェブマガジン「REALTOKYO」に掲載。

**「見巧者」になるために:Tokyo Review**

講座でとりあげたイベントのレビューと、総括として実施した公開トークの要約をウェブマガジン「REALTOKYO」に掲載。

関連講座:「見巧者」になるために:批評家・レビュー養成講座(平成22年度)

コーディネーター:小崎哲哉(「REALTOKYO」「REALKYOTO」発行人兼編集)

教本・ツールブック・ドキュメントは、TARLウェブサイトにてご覧いただけます。

TARLではウェブサイトやソーシャルメディアを活用した情報発信を行っています。

URL

<http://tarl.jp/>

Twitter

@tarl\_office

Facebook

<http://www.facebook.com/tarl302>

現場の課題に応じた新たなスキルの検証と確立を目指す「研究・開発」プログラム。新規プログラムの開発やアートプロジェクトの実践基盤を整備するための研究プログラムを開いています。本プログラムの研究成果は、TARLウェブサイト等を通して広く公開していきます。また、一部、公開研究等の開催により、研究のプロセスへの参加の機会を設けます。詳細は随時ウェブサイト (<http://tarl.jp>) にて公開していきます。

#### リサーチプロジェクトの検証：記録＝共有の手法を探る はじめる つづける かんがえる

アートプロジェクトの成果とされる事業の実施プロセスを可視化するための記録＝共有の事例を検証し、現場で有効な手法づくりを試みる。

研究期間：平成25年6月～平成26年3月

#### アートプロジェクトのインパクトリサーチ つづける かんがえる

評価に時間がかかるとされるアートプロジェクトの長期的な成果（インパクト）を調査し、検証する手法づくりを試みる。

研究期間：平成25年5月～平成26年3月

#### アートプロジェクトの「言葉」を編む かんがえる

未検証の領域が多いアートプロジェクトにまつわる言葉を読み解き、編纂を目指す。

アートプロジェクトを実施する上での理念や考え方の基盤を整備する。

研究期間：平成25年6月～平成26年3月

#### P+ARCHIVE (ピープラスアーカイブ) つづける

アートプロジェクトのアーカイブにおける記録・保存・公開のあり方を実践的に研究するプログラム。アートプロジェクトについてリサーチしたい人が閲覧可能なアーカイブセンターを開設し、アート・アーカイブの環境整備も行う。

企画運営：NPO法人アート&ソサイエティ研究センター

#### アートプロジェクトにおける「音」の記録研究 つづける かんがえる

「音」をテーマにしたアートプロジェクト「アートアクセスあだち 音まち千住の縁」を題材に、現場空間で鳴らされた「音」の記録についての考え方や手法を研究する。

研究期間：平成25年6月～平成26年3月

#### プロジェクト構想プログラム かんがえる

世界的に活躍するアーティスト・宮島達男と協働し、東京での新規プロジェクトを構想する。

企画運営：NPO法人アーツイニシアティヴトウキョウ [AIT/エイト]

#### アートプロジェクトの運営サイクルと「検証・評価」

これまで、TARLでは『アートプロジェクト運営ガイドライン』(p11参照)の「企画→実施→検証・評価」という運営サイクルを基本的な考え方として、継続的に「検証・評価」を重視したプログラムを取り組んできました。初年度から実施してきた「評価」の講座では、「評価」を行うための準備として、日常的な「記録、調査、検証」の実践が重要であることが明らかになりました。

この課題へ取り組むため、平成24年度は「評価」のためのリサーチの設計と実践を講座として実施し、「種は船」プロジェクト（日比野克彦監修）を題材に、アーカイブ、記録と調査、評価という活動を、現場で実践するプログラムとして「複合型リサーチプロジェクトの実践」を行いました。それによって、現場と併走する記録と調査の活動が、幅広い現場の動きや声を残すだけでなく、プロジェクトの実践を深め、広げる影響を持つことが明らかになりました。

運営サイクルをもとに始まり、年を追って変化する課題に対応してきたTARLのプログラム。記録から評価までの活動を、運営サイクルの「後半」の活動として位置づけることの限界も見えてきました。その問題意識に呼応するように『アートプロジェクトの運営ガイドライン』の制作から始まった帆足亜紀氏の講座は、平成24年度に「組織」から考えるアートプロジェクトの可能性へと発展しました。

ひとつのプロジェクトの運営サイクルに留まらない運営母体（組織）が日常的な活動として、いかに「検証・評価」と、そのために必要な「記録・調査・検証」を位置づけるのか。このような課題の検証は、今年度のプログラムへ継承されています。

創ることは、人間がその長い歴史の中でたゆまず続けてきた、基本的行為のひとつです。地球という惑星のこれほど異なる環境に順応しながら生きてこられたのは、とりもなおさず人間が道具を創り、試行錯誤を重ねながら住居、衣服、食事といった生活全般を営むための、さまざまな技術を開発してきたからでした。その過程で芸術が生まれたのかを正確につきとめることはできませんが、知られる限り最も古い洞窟絵画は、ホモ・サピエンスが登場した時期にまで遡ります。以来、人間の手はひとときも休むことなく、動き続けて、今日の世界を実現したのです。

創る手にいろいろな種類があるように、アートにもまた一言ではくくることのできない多様性があります。アートはどの時代にも、それぞれの社会のありよう、利用することのできる物質と技術、個人や集団の想像力といった複数の要素が働いて生み出されてきました。どの要素も、時と場所によって変化するものである以上、アートが多様化する性質をもっていることは当然のことです。特に19世紀以降、科学技術が爆発的に発展し、都市化が世界中で進行するようになって、西欧を中心にしたアートの多様化は、その幅と速度とを飛躍的に増大してきました。さまざまな機械を積極的に利用する一方、伝統的な形式をつぎつぎに乗り越えるような挑戦をつづけてきた現代アートは、今日、その活動の場所をあらゆる空間へと拡張しています。それは現実の空間だけではなく、インターネットなどの仮想空間内ですら展開しているのであり、いまやアートは時間と空間の両面において、驚くべき発展をとげています。この点でアートは、その表現形式を大きく変えてはいながら、地平線を越えてゆくという原動力を失っていないと言えるでしょう。

アートプロジェクトと総称される活動が、多様化する今日のアートにおいて重要な位置を占めていることは、いまさら言うまでもありません。世界中で繰り広げられているアートプロジェクトは、それ自体が実に多様なものです。形態によってはワークショップと呼ばれ、あるいは広域型インスタレーションとも、単にフェスティバルと命名されることもある非常に異なる活動に、明確な定義を与えることは難しい。しかしながら、いくつかの共通点を見出すことは可能です。ここではごく簡単なイントロダクションとして、アートプロジェクトにどうしても欠かすことのできないいくつかの要素を拾い出しながら、それがわたしたちの生きる都市においてもつ意義について考察したいと思います。

## 場所との関わり

アートは場所を必要とします。プロジェクトがどのような形態をもつものであれ、ある期間、一定の場所において展開する以上、そのプロジェクトがその場所とどのような関係にあるのかを理解することは、ごく基本的な要件となります。自然のなかで開催されることもあれば、都市の密集地域で行われることもある。既存の建物を利用することもあれば、建物そのものを作りこなすこともある。特定の物質を使いながら何かを構築する場合もあれば、歩行や観察といった、特定の場所の体験そのものを目的とする場合もあるでしょう。いずれにしても、プロジェク

トがその場所で行われることの意味をつかむには、リサーチが必要になります。そしておそらく、このリサーチが、アートプロジェクトという活動の、最大の特徴のひとつではないかと思うのです。

アートはサイエンスと同じように、どのような結果を出すにしても、そのための研究と開発を必要とします。たとえば画家にとっては描こうとする対象物だけでなく、道具や技術の研究と開発も日常的実践のひとつですが、アートプロジェクトにおけるリサーチは、その性格上、複数の人間が共同で行うことになります。プロジェクトが行われる場所はひとつとは限りません。複数の都市や場所を結んで同時進行的に行われることもあり、その場合はリサーチも複数行われることになります。

目的はアートであっても、プロジェクトのためのリサーチは社会学的、人類学的な性格をもっています。自然のなかで行われる場合には、地理学的な、あるいは地質学的な視点も必要になるでしょうし、場合によっては考古学者の意見を参考にする必要もでてくるでしょう。大切なことは、異なる専門や技能をもつ複数の人間が、それぞれの視点からアプローチしてゆくということです。参加者のあいだのディスカッションを通じて、相違点も明らかになるし、意見が合わないこともあります。そして、ある時点で共有することのできる、何かが見えてくる。つまりアートプロジェクトにおけるリサーチは、対象や場所を知ることを通じ、複数の視点のあいだに意識の共有を生み出すプロセスでもあるわけです。

言い換えるれば、必要な知識をあらかじめ与えられるのではなく、自らの手で獲得してゆくということであり、プロジェクトが開催される以前の、このプロセスがもっとも重要なステップとなる場合が少なくありません。特にアーティストが参加する場合は、アーティストがもっている個性的な視点も、リサーチにとって大きな意味をもってきます。アーティストにとっても、未知の場所と人々と意識を共有するために、リサーチは非常に重要なプロセスとなります。

## 社会性と時間

実際に企画が立ち上がり運営されだと、さまざまなことが起こります。多くの場合、アートプロジェクトのいちばん面白い部分は、部分的には予定され、部分的には不測であるしかない、開かれたインタラクションにあるでしょう。インタラクションと言っても、アートプロジェクトの場合は、単に作品と鑑賞者のあいだに起きる相互的な関わりだけではありません。さらに広い意味での、社会的なインタラクションを起こしてゆくのがアートプロジェクトの醍醐味でもあります。

ひとつは言うまでもなく経済的なものです。どのようにして予算を獲得するにせよ、お金というインタラクションは避けて通れません。特に21世紀に入ってからは「不安定要因」の代名詞にすらなっていて、それでも強い力をもっているお金。プロジェクトの成否を左右するものである以上、慎重かつ大胆な行動が必要とされる場合も少なくないでしょう。

もうひとつは法的なものです。グローバル化する今日の世界では、公共性の概念すらも改めて考え直さなければなりませんが、アートプロジェクトが何らかの意味での公共空間とかかわる以上、法的なインタラクションも避けることはできません。以上のふたつは、プロジェクトの規模にかかわらずある程度の専門的な知識やアドバイスを必要とすると思います。

三つめは、時間的なものです。プロジェクトが一日だけで終わる場合と1週間、1ヶ月、ときには3ヶ月間といった長期にわたる場合では、大きく異なる内容が想定されます。そのためのエネルギーと資本が変わってくるのは当然ですが、それでだけでなく参加者の意識や感情も変わってくるでしょう。アートプロジェクトにおいて時間の要素は非常に大きいと思います。ここからプロジェクトのタイム・ベースト・デザインすなわち、時間に依存するデザインとしての性格が出てきます。時間的インタラクションをどのように評価するかが、内容に影響を及ぼす場合もあります。

以上のように、社会性と時間性とがアートを通じて、目に見えるかたちで立ち現れてくるとき、参加者のあいだに実践=プラクシスの感覚が強く意識されるのだと思います。

#### 身体性と記憶

プロジェクトでは、あらかじめ対象とされる参加者が決められている場合もあれば、不特定多数の参加者を募集する場合もあります。どちらにおいても、人間がある場所へ身体を運び、何らかのアクションを起こさなければなりません。このときの身体は、個でありながらアートを通じて共同の動きをしてゆくという意味で、集団的身体であると言えるでしょう。

集団的身体をつくりだすのは、プロジェクトの実践全般にかかわることです。特に、広報は重要な役割を担っています。アートプロジェクトにおける広報は美術展の開催を知らせるのとはわけが違います。単なる告知ではなく、それを通じてどのような集団がどのようなアクションを起こしてゆくのかが理解されることが求められる。まだ起きていないが、これから起きるであろうさまざまなアクションについて有効に伝えるには、説明文もイメージもかなりの工夫が必要になるでしょう。一般的な美術展が、「すでに起きたこと」としての作品を鑑賞者という集団へ差し出すことだとすれば、アートプロジェクトは「これから起こそうとすること」へ向けて、集団的な身体をつくってゆく営みであると言ってもいいかもしれません。

プロジェクトを実現する集団的身体の経験は、進行中にもまたそれが終わった後にも、周りの人に伝わってゆきます。直接関係した人だけでなく、当該の地域や、遠く離れた場所にも経験が共有されるためには、言葉が必要です。この点でプロジェクトの広報は、プロジェクトの記録と切り離せない関係にあると言えるでしょう。ブログやツイッターなどによるリアルタイムな経験の共有が、プロジェクトの機動力を高めていることは注目すべきですが、それだけではなく、一定の距離を置いて眺めた冷静な評価もまた、記録としては大切なことであると思います。

アートプロジェクトの記録は、それが行われた場所の記憶と結びついて、蓄積されてゆくものであると思います。すぐれたプロジェクトは、事例として未来のプロジェクトにとって重要な参考となるし、ヴァリエーションとして別の場所で別の人々によって展開されてゆくこともあるでしょう。集団的なアクションの記憶は、このようにして異なる場所へ伝播しつつ、静かに共有されてゆく。複数の創る手は、ひとつの場所を開くことによって、未知の地平線を開いてゆくことにもつながっているのだと思います。

#### 社会的創造者としてのリサーチャー

以上のようにアートプロジェクトを支える人と組織は、広い意味でのリサーチャーを担っています。ここでの「リサーチャー」は、ふつう使われるような学術的な意味の研究を含みながらも、人ととの関わりや組織づくりにも重点を置いている点で、より広い社会性をもったリサーチャーと言えるでしょう。人材育成プログラム「Tokyo Art Research Lab」が育成をめざす人材は、まさしくこのような社会的なリサーチャーにあります。アーティストも含め、アートプロジェクトに参加する成員はリサーチャーとして、人々の生活圏のなかにあって日常的には目に見えない、さまざまな事象を発見し、相互の関係性を密にしながら、それを創造性へとつなげてゆくことが求められます。リサーチャーにとっては生活圏そのものが、創造性の源泉なのです。

わたしは、この点でアートプロジェクトとは、「社会的創造性」と呼ぶべき資質をもつ人材を必要としているのだと思います。こうした人材の育成が既存の公的教育のカリキュラムのなかでは扱われてこなかったことは、ジャンルや枠によって細分化されたアートの歴史を顧みれば、むしろ当然のことでした。しかしあつてアルビン・トフラーが『第三の波』で予見した、すべての人が潜在的な情報発信者になれるような時代が現実のもとなつた今日、既存の枠組みを横断するようなタイプの「リサーチャー」は、世界的に広く求められてゆくと思われます。「Tokyo Art Research Lab」の試みは、新たな創造性の時代を拓いてゆくための、第一歩といつても過言ではないでしょう。

#### 港千尋（写真家、著述家）

1960年生まれ。1995年より多摩美術大学情報デザイン学科教授。オックスフォード大学客員研究員。著書・作品集多数。記憶とイメージをテーマに、映像人類学など幅広い活動をつづけている。『愛の小さな歴史』（インスクript）『パリを歩く』（NTT出版）『芸術回帰論』（平凡社新書）『ヴォイドへの旅』（青土社）。最近の展覧会に『レヴィ=ストロースの庭』（Cスクエア 名古屋）『アジアの痕跡』（ANUギャラリー キャンベラ）。台北ビエンナーレなど国際展のキュレーションも行い、2007年には第52回ベネチア・ビエンナーレ日本館コミッショナーを務めた。

TARL企画・監修  
東京アートポイント計画  
ディレクター：森司  
プログラムオフィサー：佐藤李青

TARL事務局  
NPO法人アーツイニシアティヴトウキョウ [AIT/エイト]  
コーディネーター：小澤慶介、橋本誠  
アシスタントコーディネーター：高村瑞世、依田理花、米津いつか  
サポートスタッフ：石井萌、小澤恭子、三木茜、吉川晃司

お問い合わせ  
東京アートポイント計画やTARL全般について  
東京文化発信プロジェクト室（平日10:00-18:00）  
Tel: 03-5638-8803 E-mail: info-ap@bh-project.jp

TARL講座情報、成果物やウェブサイトについて  
Tokyo Art Research Lab事務局（NPO法人アーツイニシアティヴトウキョウ [AIT/エイト]）  
Tel: 080-3171-9724 Fax: 03-6740-1926 E-mail: info@tarl.jp

Tokyo Art Research Lab 2013

編集：東京アートポイント計画（森司、佐藤李青、坂本有理）  
デザイン：福岡泰隆  
印刷：株式会社アイワード

発行：公益財団法人東京都歴史文化財団 東京文化発信プロジェクト室  
〒130-0026 東京都墨田区両国3-19-5 シュタム両国5階  
Tel: 03-5638-8803 E-mail: info-ap@bh-project.jp  
<http://www.bh-project.jp>

平成25年6月 ©東京文化発信プロジェクト室